



あらくれ会集合写真 昭和7年(1932)5月撮影/大田区立郷土博物館提供

徳田秋聲(前列中央)を師と慕う、当時活躍中の文士が一堂に会したもの。尾崎士郎(秋聲の後ろ左側)が会の中心となったことから、会員の多くが馬込文士で構成されたと考えられる。

# 大田区立尾崎士郎記念館版 記念館ノート

## 創刊号

発行：2017年3月1日  
編集：大田区立龍子記念館

## 館のトピック

### ◆尾崎士郎の山王自宅について

尾崎は大森好きを公言し、仲間を呼び寄せたことで馬込文士村の中心人物となりました。大森界隈を舞台とした作品も少なくありません。よほど気に入ったのか、尾崎は大正十二年(一九二三)二十五歳の頃に転入してから、一時的な転居を除き、亡くなるまで四十年以上に渡って大森で暮らしました。特に昭和七年(一九三二)から昭和十一年(一九三六)まで暮らした源蔵原は、大森相撲協会の結成、代表作「人生劇場」の連載開始、長女・一枝の誕生など尾崎にとって思い入れの強い場所となりました。後に尾崎は借家住まいを転々とし、昭和二十九年(一九五四)、愛着のある源蔵原(現・山王一三六一―二六)に念願の持ち家を新築し、終の棲家としました。

昭和三十年代に入り、尾崎は山王自宅の書齋で旺盛な執筆を進めていましたが、昭和三十八年(一九六三)十月には、以前患った腸癌を再発し、手術後は入院せずに自宅での療養を選びました。翌年二月十九日、病臥していた客間で家族や友人に看取られながら、尾崎は六十六歳でこの世を去りました。

現在、山王の自宅は、客間、書庫等を部分保存、移築した書齋を復元し、尾崎の功績を讃えて、大田区立尾崎士郎記念館として公開しています。



尾崎の嗜好がうかがえる客間。最期を迎えた部屋となった。

## 平成29年度の予定

平成30年2月5日の尾崎士郎生誕120年にむけ、講座、展示替え等予定しております。

### 1. 講演会

○平成29年5月21日(日)「馬込文士の足跡をたずねて～尾崎士郎と『人生劇場』～」

尾崎士郎の代表作『人生劇場』は、昭和10年の初刊以降、何度も再刊、映画化、演劇化を繰り返し、歌謡曲も知られています。様々な『人生劇場』の制作秘話、登場人物のモデルについて講演します。

○平成30年2月4日(日)「馬込文士の足跡をたずねて特別編～尾崎士郎の生涯～」(仮)

尾崎が上京するまでの概略をご紹介した後、尾崎が40年以上にわたって暮らした大森のゆかりの場所をご案内いたします。

### 2. 展示

○平成30年1月4日(木)から新規常設展示

## 館の基本情報

### 《所在地》

大田区立尾崎士郎記念館  
〒143-0023 東京都大田区山王1-36-26  
※建物内には、お入りいただけません  
TEL 03-3772-0680 (龍子記念館内)  
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/ozaki>

### 《アクセス》

- ①JR大森駅西口(山王方面)より徒歩10分
- ②JR大森駅より東急バス「上池上循環 内回り」、「新代田駅前」行乗車「山王二丁目」下車、徒歩3分

### 《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで
- ※入館は午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 年末年始・臨時休館
- 駐車場 バリアフリー用に普通車1台分

## 尾崎士郎と大相撲―大森相撲協会結成の背景―

大田区立尾崎士郎記念館担当学芸員 黒崎 力弥

### はじめに

大相撲は、尾崎士郎を語るうえで欠かせないものの一つである。「もし、この世の中に相撲がなかったら、私のこの世に生きる魅力の三分の一は減殺されたであろうと思う」と語り（『相撲随筆』序文）、『相撲随筆』『相撲を見る眼』『小説国技館』など相撲に関する作品を生涯に渡って発表し続けた。観戦や批評だけでは収まらず、昭和七年（一九三二）には、文士仲間を誘って「大森相撲協会」を結成し、自らまわしを絞めて土俵に立つなど意欲的に取り組んだ。

昭和二十五年（一九五〇）五月には、相撲に関して長年にわたる功績が認められて、横綱審議委員に選ばれた。また、伝説の力士を描いた『雷電』（『週刊読売』昭和二十九年（一九五四）七月）昭和三十二年（一九五七）八月 全一〇八回）は代表作『人生劇場』に次ぐ長さで、六十代に差し掛かる尾崎の本領を發揮した作品となった。本稿は、数ある尾崎の相撲への関わりの中から、大森相撲協会に注目し、結成の背景について紹介する。

### 一 大関・清水川の存在

尾崎は大森相撲協会を結成した理由として、大関・清水川の存在を挙げている。まずは、尾崎が最良にした清水川について紹介したい。

大正七年（一九一八）頃から、尾崎は本場所開催になると毎日のように国技館に通って観戦し、中でも清水川を最良とした。近代の名大関と称される清水川だが、大関にいたるまでの道のりは険しかった。昭和二年（一九一三）、小結時代の清水川は素行の悪さから、日本相撲協会の除名処分を受けて一旦廃業した。その処分を受け、清水川の父・元吉が協会復帰の嘆願書を提出し、その後自死してしまった。清水川は父の思いを受けとめて元吉と改名し、昭和四年（一九一五）、十両で協会に復帰し、精進する

姿から不動の人気を得た。相撲において理論よりも情を優先した尾崎は「悲劇的な性格と運命を克服して、明朗極まりなき大関の地位を築き上げた力士は古往今来一人もなかった」と清水川に入れ込み、作品で幾度と取り上げた（『大関清水川』『相撲随筆』）。

### 二 大森相撲協会結成の背景と結末

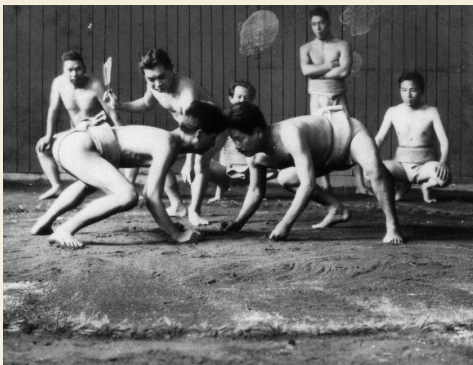
昭和七年（一九三二）には、相撲争議「天龍事件」が発生し、相撲界は関西相撲協会と日本相撲協会に分かれてしまった。その際、清水川が日本相撲協会に残ったことで、尾崎は日本相撲協会支持を決心し、大森相撲協会を結成した。

はじめに述べたように、大森相撲協会とは、尾崎が中心となって仲間を誘い、結成したアマチュア相撲団体である。池上本門寺の裏にあった廃墟（実業家・山本唯三郎の旧居 内敷地に本場所土俵を築き、稽古に励んだ。尾崎は大森相撲協会結成に関して、スポーツ団体として自分たちの汗を流す目的以外に、「天龍事件がきっかけとなって「大森相撲協会」が成立したのも決して偶然ではない」と天龍事件との関わりを述べている（『大森部屋』『文学の零点』）。

次に、大森相撲協会成立のきっかけとなった「天龍事件」の詳細について紹介する。

昭和四年（一九二九）に発生した世界的な恐慌により、日本相撲協会に所属する力士への手当が減り、未払いが起きているという事態が発生した。この頃は拳闘ブームで相撲の人気に衰えがあり、本場所の来場者数も減少していた。

昭和七年（一九三二）一月、関脇・天龍を中心とした力士が日本相撲協会に対し、会計を明確にすること、力士の生活を保障



大森相撲協会取組風景（手前左側、尾崎士郎）昭和七年（一九三二）頃撮影／大田区立郷土博物館提供

することなどを求めたが、返答がないため天龍一派が相撲協会を脱退し、新たに関西相撲協会を結成した。人気力士のほとんどが天龍側に流れたことで国技館の客足が途絶え、当時、通常だと十日間ほど開催される本場所が八日で終わる事態となった。関西相撲協会を是とする風潮が強い中、尾崎は日本相撲協会支持を表明した。

私が協会を支持する立場をとったのは、清水川の残留したことも原因はあるが、それよりも国技館を中心とする生活の雰囲気への愛着のためというべきが至当であろう。私は進んで発起人となって大森相撲協会をつくり、文壇の一角に相撲を煽りたてた。（『大森相撲協会』『相撲随筆』）

大森相撲協会は、当時の若手文士たちがメンバーとなっており、その動向が注目された。特に東京日日新聞（現・毎日）が熱心で文化部を中心に主催大会の計画が成立しつつあった。ところが、六月に本場所を三日間開催しただけで大森相撲協会は解散してしまった。まず、三日目終了後、片付けをしている最中、山本唯三郎の請願巡査を自称する人物が現れ、敷地を無断使用したことに憤慨し、遺族に借入金を支払うよう申し入れがあった。元祖成金と言われた山本家は没落しており、すでに唯三郎は亡く、一家は離散していたため、尾崎は遺族と連絡の取りようがなかった。次に、尾崎の想像以上に大森相撲協会が注目を浴び、東京日日新聞の主催大会計画等に面々が委縮してしまい、大会が実現することなく、大森相撲協会は稽古が途絶えて自然消滅という形で解散してしまっただけが挙げられる。大森相撲協会は結成の目的を果たせなかったものの、最良にした清水川や日本相撲協会支持のために同会を結成したということは、情を重んじた尾崎を象徴するよるな行動であったと言える。

#### 主要参考文献

- ・尾崎士郎『相撲随筆』野田書房 昭和十三年／六興出版 底本昭和五十七年
- ・尾崎士郎『相撲を見る眼』東京創元社 昭和三十一年
- ・安藤英男『大相撲人物史』日貿出版社 昭和五十一年